

申請者	学科名	デザイン工学科	職名	准教授	氏名	津田 勢太 印
調査研究課題	遠隔地域の住民との協働による公園活性化デザイン手法					
交付決定額	320,000円					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	津田勢太	デザイン工学科・准教授	建築構造	全体統括	
	分担者	中原嘉之	デザイン工学科・助手	デザイン模型	工事作業全体の指揮	
		伊藤立平	伊藤立平建築設計事務所代表, 本学非常勤講師	建築設計	設計協力, 広報, 地域折衝	
	梶田洋子	桃李舎代表, 本学非常勤講師	構造設計	設計協力		
調査研究実績の概要	<p>H25年度, 産学官連携GP事業の一環で3畳の木造茶室を学内で制作した。木材の加工から土壁の下地となる竹小舞の設置, 土壁塗りなど, できるだけ伝統的な方法を用いて学生が制作したものであり, 木造建築の設計と施工を実践的に学ぶ教材とした。本研究では, この茶室を一旦解体して福島県南相馬市まで運び, 住民の方々に役立てるようなデザインで再生することを目指したものである。</p> <p>福島第1原発の事故により, その周辺地域では生活するうえでの様々な困難を強いられているが, 公園などを舞台として活用して市民を元気にしていこうというアクションが, 地域の有志の人々の自主的・自発的な行動から巻き起こっている。2014年7月, 岡山県立大学にてシンポジウム「福島南相馬, 市民がつくる賑やかな未来」を開催し, 復興活動を積極的に行われているNPO法人みんな共和国の近藤能之氏を招聘し, 震災以降の取り組みや今後の希望などについて講演していただくとともに, 移築デザインや移築先について討論した。このシンポジウムをきっかけとして, この後多くの学生が自発的にメンバーとなってプロジェクトを推進していくこととなった。</p> <p>移築先としては避難指示のために未だに仮設住宅暮らしが続いている南相馬市鹿島区の寺内塚合第2仮設住宅および小池長沼仮設住宅が管理している広場に決定した。この広場は子どもたちが遊ぶ遊具や住民が耕した農園があって, 普段から多くの住民に利用されている。また, 週末などには復興イベント等が開催されるなど, 様々な形で多くの方々が利用する重要な広場である。</p>					

この広場にはどのようなデザインが望ましいか、共同研究者や学生たちが作成した複数案を現地の方に提示し、頂いた意見をもとにして最終デザイン案に反映していった。日常的には、子どもたちが遊び場として使えて視認性も高い開放性ある形態であるとともに、農作業などの合間に一息つけるような日陰を提供できるような東屋として、またイベント時には舞台および楽屋、資材置き場として活用できることを目指した案である。

大学で制作した茶室よりもひとまわり大きくなったため、計3回に分けてワークショップを開催する計画とした。第1回は2014年11月28～30日、第2回は2014年12月12日～14日、第3回は2015年3月13日～16日であり、計10日を要して完成した。当初計画では1～2回のワークショップを考えていたが、回数を増やしたことによって、地元の方々との交流を重ね親交を深めることができたことは良かったことである。

本プロジェクトには、7月開催のシンポジウム以降、9人の学生が自主的に参加して、デザイン案の作成から、大学での木材加工や現地での工事作業、また広報活動など多岐に渡り活躍した。また、現地で多くの人と接し、多くの未知の状況を実際に見るとい今回の経験を、遠く離れた地で伝えていくという役割も担うであろう。今後、地域貢献へ積極的に取り組むきっかけになることも期待される。

現地作業にあたっては、仮設住宅にお住まいの方々、地元の高校生、他府県からの応援など、多くの方々の協力のもとで完成することができた。また、天井には色鮮やかにペイントされたアートが設置された。これは、非営利任意団体・一時画伯が企画実行したワークショップ（羽田空港ターミナルビル、および、南相馬市よつば保育園にて開催）で、子どもたちが描いたものである。関係者の積極的行動および情報発信により、学外からも多くの方が様々な気持ちを込めてプロジェクトに参加し、完成に至ることができた。

今後はメンテナンスを兼ねて再訪するとともに、2016年3月に予定されている避難指示解除に向けて再移築することを考えていく予定である。

調査研究実績の概要



図1 シンポジウム



図2 デザイン提案



図3 作業風景



図4 完成写真

成果資料目録

- ・津田勢太, 中原嘉之: 小規模木造建築の設計施工を通じた構法・材料教育, 日本建築学会中国支部研究報告集, 第38巻(CD-ROM), Paper No. 185, 2015. 3.
- ・新聞記事 (毎日新聞2014. 12. 31/朝日新聞2015. 3. 8/毎日新聞2015. 3. 11)